

2023年3月期 第1四半期決算短信（日本基準）（連結）

2022年8月4日

上場会社名 株式会社ヤマダホールディングス

上場取引所

東

コード番号 9831 URL <https://www.yamada-holdings.jp/>

代表者 (役職名) 代表取締役会長兼社長CEO

(氏名) 山田 昇

問合せ先責任者 (役職名) 執行役員経営企画室長

(氏名) 清村 浩一

TEL 0570-078-181

四半期報告書提出予定日 2022年8月12日

配当支払開始予定日 —

四半期決算補足説明資料作成の有無 : 無

四半期決算説明会開催の有無 : 無

(百万円未満切捨て)

1. 2023年3月期第1四半期の連結業績（2022年4月1日～2022年6月30日）

(1) 連結経営成績（累計）

(%表示は、対前年同四半期増減率)

	売上高		営業利益		経常利益		親会社株主に帰属する 四半期純利益	
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%
2023年3月期第1四半期	375,859	△1.9	12,263	△42.8	14,440	△39.1	14,680	△15.7
2022年3月期第1四半期	382,987	△5.8	21,426	△5.3	23,728	△2.1	17,413	9.6

(注) 包括利益 2023年3月期第1四半期 14,587百万円 (△16.5%) 2022年3月期第1四半期 17,471百万円 (14.6%)

	1株当たり四半期純利益	潜在株式調整後 1株当たり四半期純利益
	円 銭	円 銭
2023年3月期第1四半期	17.21	17.12
2022年3月期第1四半期	21.24	21.14

(2) 連結財政状態

	総資産	純資産	自己資本比率
	百万円	百万円	%
2023年3月期第1四半期	1,318,132	659,206	49.5
2022年3月期	1,271,668	676,277	51.6

(参考) 自己資本 2023年3月期第1四半期 652,141百万円 2022年3月期 656,702百万円

2. 配当の状況

	年間配当金				
	第1四半期末	第2四半期末	第3四半期末	期末	合計
	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭
2022年3月期	—	0.00	—	18.00	18.00
2023年3月期	—	—	—	—	—
2023年3月期 (予想)	—	—	—	—	—

(注) 直近に公表されている配当予想からの修正の有無 : 無

(注) 今後の株主還元策は、業績の推移を鑑み決定してまいります。

3. 2023年 3月期の連結業績予想（2022年 4月 1日～2023年 3月31日）

(%表示は、通期は対前期、四半期は対前年同四半期増減率)

	売上高		営業利益		経常利益		親会社株主に帰属する 当期純利益		1株当たり 当期純利益
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%	円 銭
第2四半期(累計)	821,000	2.6	32,500	△7.4	35,800	△8.9	25,900	△13.6	30.74
通期	1,694,000	4.6	73,900	12.5	80,000	7.9	51,900	2.7	62.06

(注) 直近に公表されている業績予想からの修正の有無 : 無

※ 注記事項

(1) 当四半期連結累計期間における重要な子会社の異動（連結範囲の変更を伴う特定子会社の異動）： 無

(2) 四半期連結財務諸表の作成に特有の会計処理の適用： 無

(3) 会計方針の変更・会計上の見積りの変更・修正再表示

- ① 会計基準等の改正に伴う会計方針の変更： 無
- ② ①以外の会計方針の変更： 無
- ③ 会計上の見積りの変更： 無
- ④ 修正再表示： 無

(4) 発行済株式数（普通株式）

- ① 期末発行済株式数（自己株式を含む）
- ② 期末自己株式数
- ③ 期中平均株式数（四半期累計）

2023年3月期1Q	966,647,930 株	2022年3月期	966,647,930 株
2023年3月期1Q	126,747,430 株	2022年3月期	130,619,777 株
2023年3月期1Q	852,906,192 株	2022年3月期1Q	819,696,935 株

※ 四半期決算短信は公認会計士又は監査法人の四半期レビューの対象外です

※ 業績予想の適切な利用に関する説明、その他特記事項

本資料に記載されている業績予想等の将来予測に関する記述は、発表日現在において入手可能な情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいたものであり、その達成を当社として約束する趣旨のものではありません。実際の業績等は様々な要因により大きく異なる可能性があります。なお、上記の予想に関する記述は、添付資料3ページ「1. 当四半期決算に関する定性的情報 (3) 連結業績予想などの将来予測情報に関する説明」をご覧ください。

○添付資料の目次

1. 当四半期決算に関する定性的情報	2
(1) 経営成績に関する説明	2
(2) 財政状態に関する説明	3
(3) 連結業績予想などの将来予測情報に関する説明	3
2. E S G ・サステナビリティについて	4
3. 四半期連結財務諸表及び主な注記	9
(1) 四半期連結貸借対照表	9
(2) 四半期連結損益計算書及び四半期連結包括利益計算書	11
四半期連結損益計算書	
第1四半期連結累計期間	11
四半期連結包括利益計算書	
第1四半期連結累計期間	12
(3) 四半期連結財務諸表に関する注記事項	13
(継続企業の前提に関する注記)	13
(株主資本の金額に著しい変動があった場合の注記)	13
(追加情報)	13
(セグメント情報)	13
(重要な後発事象)	14

1. 当四半期決算に関する定性的情報

（1）経営成績に関する説明

〔国内外経済等の背景について〕

当第1四半期連結累計期間における我が国の経済は、新型コロナウイルス感染症の新たな変異株の出現に加え、ウクライナ情勢の長期化や資源、エネルギー価格高騰、円安の急伸等の要因により、引き続き先行きは不透明な状況となっております。

家電小売業界では、新型コロナウイルス感染症の影響によって生じた巣ごもり需要の反動減、生活防衛意識の高まりによる消費者の節約志向の上昇、一部製品の供給不足、原油高騰等に伴う各種コスト増加があった一方、6月後半の過去最短の梅雨明けと共に到来した酷暑によりエアコンを中心とした季節商品や省エネ性能の高い高単価冷蔵庫が好調に推移しました。

〔当社の取り組みについて〕

このような市況を背景に、当社グループは、「YAMADA HD 2025 中期経営計画」スタートの年として、目標達成に向け以下の4つの重点施策、①店舗開発の積極的推進 ②Eコマースの強化推進 ③SPA商品の積極的開発 ④各事業会社別 課題の目標設定で目標達成を図る を実行することにより、継続した増収増益体制を構築して参ります。

重点施策である店舗開発の積極的推進については、新規出店及び店舗増改築や業態変更を積極的に進める中、「暮らしまるごと」戦略の強化として、「たのしい。くらしをシアワセにする、ぜんぶ。」をストアコンセプトにした体験型店舗「L I F E S E L E C T（家電、家具・インテリア、生活雑貨、リフォーム、おもちゃ等、くらしのあらゆるモノがそろそろ、地域最大級品揃えのお店）」を2021年6月18日の熊本春日店を皮切りに合計23店舗オープン致しました（L A B I L I F E S E L E C T 5店舗、T E C C L I F E S E L E C T 18店舗のうち新規出店4店舗）。また、インターネット販売と店舗が融合したYAMADA Web. c o m店やアウトレット・リユース商品を豊富に揃えたアウトレット店舗等、さまざまな業態店舗の開発を行い既存の家電専門店と合わせ、家電製品を中心とした住まいに関連する製品の販売拡大により、売場面積の拡充とシェアの向上は堅調に推移しています。Eコマースについては、自社ECサイトの刷新やテレビショッピング、L I V E コマース販売等の販路拡大による強化を図っております。SPA商品については、新たに折り畳み式リビング扇風機や換気機能付きエアコン等、お客様の声をダイレクトに活かした商品を投入し発売以来、好調に推移しています。

当第1四半期連結累計期間の売上高につきましては、①前年度より継続している一過性の巣ごもり需要反動減 ②物価上昇に伴う消費者マインドの低下 ③一部製品の供給不足等によって前年同期比1.9%減の3,758億59百万円となりました。また、当第1四半期連結累計期間においては、売場面積の拡充と「暮らしまるごと」戦略の強みを発揮するための店舗投資（出店や改装等の積極的な店舗開発、耐震化等店舗の強靱化、全店LED化等）が先行しておりますが、その効果はサプライチェーンの正常化と共に最大化されます。

利益につきましては、従来から進めている「企業体質強化経営改革」による売上総利益（率）の向上に取り組んだものの、一部製品の供給不足や前期の半導体不足懸念対策の先行仕入反動による仕入高の大幅減少に伴う粗利高の減少、物価上昇等に伴う販売管理費の増加により営業利益は前年同期比42.8%減の122億63百万円、経常利益は前年同期比39.1%減の144億40百万円、親会社株主に帰属する四半期純利益は当期より適用したグループ通算制度や子会社グループ再編に伴う税効果等により前年同期比15.7%減の146億80百万円となりました。

〔セグメント別の業績状況〕

①デンキ事業

デンキ事業における売上高は3,148億68百万円（前年同期比2.8%減）、営業利益は126億74百万円（前年同期比41.1%減）となりました。

デンキ事業の売上高および営業利益高につきましては、リフォーム、家具・インテリアは順調に売上を伸ばしたものの、前述した要因により減少しました。

なお、売場面積の拡大は順調に推移しており、この成果は下期以降に堅調に表れてきます。

②住建事業

住建事業における売上高は564億41百万円（前年同期比2.1%増）、営業利益は△11億60百万円（前年同期営業利益△6億60百万円）と、前年から5億円の減益となりました。

住宅業界につきましては、新設住宅着工戸数（持家）が2021年12月より減少に転じており、厳しい環境が続いておりますが、当社グループは、受注棟数及び受注金額が前年同水準で推移しております。売上高は、前年の受注増加分が完成引渡しを迎え、好調に推移しました。営業利益につきましては、ウッドショックに伴う住宅資材高騰の影響により、前年を下回りました。

住建事業の会社別実績は、①ヤマダホームズは売上高177億76百万円（前年同期比2.9%減）、営業利益△8億57百万円（前年同期の営業利益△6億91百万円）の減収・減益 ②ヒノキヤグループは売上高247億40百万円（前年同期比5.0%増）、営業利益△2億98百万円（前年同期の営業利益1億64百万円）の増収・減益 ③バスやキッチン等の開発、製造を担うハウステックは、ウッドショックに伴う住宅資材不足や上海ロックダウンに伴う納期遅延がありましたが、当社グループのシナジー効果、リフォーム案件の増加等により売上高140億7百万円（前年同期比2.0%増）営業利益3億8百万円（前年同期比4.6%増）の増収・増益となりました。

なお、昨今のウッドショックに伴う住宅資材高騰影響は、付加価値提案による販売単価向上及びコスト削減等の経営改革、ナイス株式会社との包括的取り組みによるシナジー効果により改善方向で推移しております。

③金融事業

金融事業における売上高は6億14百万円（前年同期比11.3%増）、営業利益は1億2百万円（前年同期比727.9%増）となり、住建事業と関連の深い住宅ローンが好調に推移したことにより増収・増益となりました。

ヤマダNEOBANKサービスの利便性向上による新たな金融サービスを提供することによる「暮らしまるごと」戦略の深化を図ってまいります。

④環境事業

環境事業における売上高は77億89百万円（前年同期比18.9%増）、営業利益は3億46百万円（前年同期比35.4%増）となり、当社グループ完結型で進める「環境資源開発」への取り組みの成果により増収・増益となりました。

なお、2022年5月20日にヤマダ東日本リユースセンター群馬工場を増設し、リユース製品の生産台数を従来の年間7万台から年間30万台に向けた体制の構築を行いました。

⑤その他事業

その他事業における売上高は79億42百万円（前年同期比16.0%減）、営業利益は2億86百万円（前年同期比19.9%減）となりました。

デンキ事業と同様の要因により、家電販売を中心としたF Cの売上高および営業利益高が減少しました。

〔店舗数について〕

当第1四半期連結会計期間末の店舗数（海外含む）は、5店舗の新規出店により、直営店舗数1,020店舗（ヤマダデンキ直営996店舗、その他連結子会社24店舗）となり、F Cを含むグループ店舗数総計は12,121店舗となっております。

〔業績のまとめ〕

以上の結果、当第1四半期連結累計期間の業績は、売上高375,859百万円（前年同期比1.9%減）、営業利益12,263百万円（前年同期比42.8%減）、経常利益14,440百万円（前年同期比39.1%減）、親会社株主に帰属する四半期純利益14,680百万円（前年同期比15.7%減）となりました。

（2）財政状態に関する説明

当第1四半期連結会計期間末の総資産額は、前連結会計年度末（2022年3月末）に比べ46,464百万円増加（前期比3.7%増）して1,318,132百万円となりました。主な要因は、季節商品の仕入等による商品及び製品の増加によるものであります。

負債は、63,536百万円増加（前期比10.7%増）して658,926百万円となりました。主な要因は、季節商品の仕入等に備えた運転資金の借入に伴う短期借入金の増加によるものであります。

純資産は、17,071百万円減少（前期比2.5%減）して659,206百万円となりました。主な要因は、取締役会決議に基づく新規取得による自己株式の増加によるものであります。この結果、自己資本比率は49.5%（前期末は51.6%）となりました。

（3）連結業績予想などの将来予測情報に関する説明

本資料に記載されている業績予想等の将来予測に関する記述は、発表日現在において入手可能な情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいたものであり、その達成を当社として約束する趣旨のものではありません。実際の業績等は様々な要因により大きく異なる可能性があります。

2. E S G ・サステナビリティについて

ヤマダホールディングスグループは、家電製品をはじめ、住宅や暮らしに関する様々な製品やサービスをご提供する小売グループとして、お客様をはじめとする幅広いステークホルダーのニーズに応え、社会の課題解決に向けて積極的に貢献することを目指しています。

2019年12月に、持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals, SDGs）の重点分野として、3つのテーマ「快適な住空間の提供と社会システムの確立」、「社員の成長と労働環境改善」及び「循環型社会の構築と地球環境の保全」に注力していく方針を公表致しました。

近年、サステナビリティへの取り組みがお客様のブランド選択の重要な要件にもなってきています。家電や家具、インテリア、住宅、リフォーム、金融、環境資源循環など、「暮らしまるごと」をコンセプトとし、事業を通じてこれらの課題を解決するため主要指標として以下のKPIを設定いたしました。今後、これらのKPIの進捗状況について定期的に報告していきます。

マテリアリティ	インパクト	KPIの項目	目標・方針	SDGs
快適な住空間の提供と 社会システムの確立	住居	「ZEH住宅」の搭載率	2030年度：50%	
		「Z空調」の導入数	2022年度内 目標設定	
		太陽光パネルの出荷量	2030年度： 5万枚	
社員の成長と 労働環境の改善 (ダイバーシティ・エ クイティ&インクルー ジョン)	働きやすい職場環 境の整備	社員満足度調査における指標	2022年度内 目標設定	   
		長時間労働の抑制に向けた取り組み	毎年： 取り組みの継続	
		有給休暇取得率	毎年：前年比増	
	包括的で 健全な経済	女性管理職比率	2030年度： 10%以上	
		女性および男性社員の育児休業取得率	2023年度： 女性85%以上 男性：7%以上	
循環型社会の構築と 地球環境の保全	・気候変動対応 ・CO2排出量削減	省エネ家電製品の普及促進による使用者の電力 使用量およびCO2排出量の削減	2022年度内 目標設定	   
		電力使用量全体に占める再生可能エネルギー (スコープ2)	毎年：前年比増	
		延べ床面積当たりCO2排出量（スコープ2）	毎年： 前年比10.2%減	
	・廃棄物減容 ・サーキュラーエ コノミー	家電4品目のリユース（テレビ、冷蔵庫、洗濯機、 エアコン）	2030年度： 30万台	
		パソコンリユース	2030年度： 40万台	

〔気候変動への取り組みとTCFD〕

①気候変動への対応について

当社グループでは、「暮らしまるごと」をコンセプトに、お客様の生活基盤を支える多様な家電製品や住宅設備、家具・インテリア用品を取り扱っています。これらの製品は、日本国内だけでなく世界各地で製造・加工され、それぞれの地域における様々な資源が使用されています。このため、気候変動への対応や自然環境の保全は、当社グループの持続的な成長においても重要なテーマであると考えています。

当社グループではこれまで、気候関連財務情報開示タスクフォース（TCFD）に基づく開示に向けて、グループ全体の現状把握、ガバナンス体制の整備、リスク管理、戦略および指標と目標に関する検討を進めてまいりました。今後も気候変動に伴うリスクを適切に管理すると共に、脱炭素社会に向けた様々な変化を持続的な成長につながるビジネスチャンスととらえ、気候変動に対応する取り組みを積極的に進めて参ります。

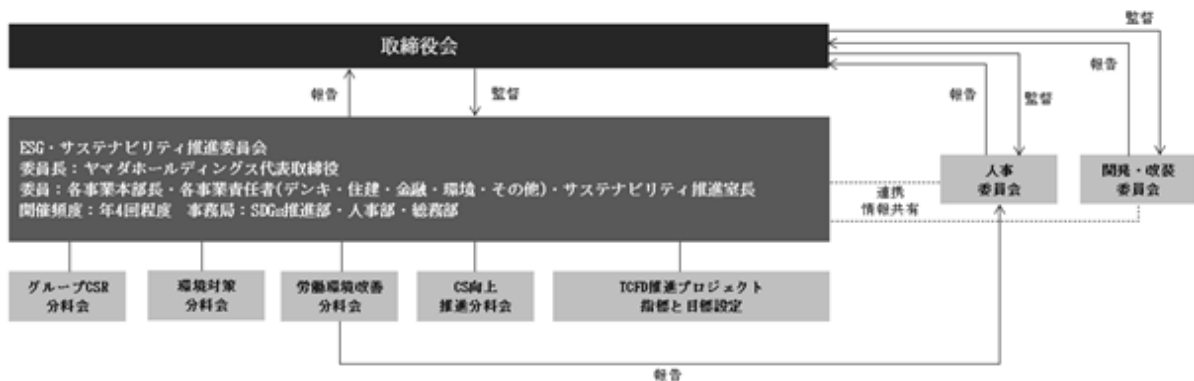
（TCFDに基づく気候関連情報および指標と目標についての詳細は今後ホームページにて開示してまいります）

区分	主な取り組み
自社グループにおける 温室効果ガスの削減 (スコープ1及び2)	● 再生エネルギー電力の購入 ● 現存の自社太陽光発電量売却後のPPA ● ヤマダエネルギープラントにより発電される電力の自社消費 ● 営業車のEV化等
お客様の使用時等における 温室効果ガスの削減 (スコープ3)	● 省エネ家電製品の普及促進 ● 新築注文住宅におけるZEH搭載 ● 新築注文住宅における太陽光パネル設置

②ガバナンスについて

当社グループでは、環境・社会課題に関する方針・施策の審議と目標の進捗確認および取締役会への答申等を行う場として、「ESG・サステナビリティ推進委員会」を設置し、ヤマダホールディングス代表取締役を委員長に、各事業本部長、各事業責任者（デンキ・住建・金融・環境・その他）・サステナビリティ推進室長が委員を務め、重要事項についての意思決定を行っています。ESG・サステナビリティ推進委員会の配下にある「グループCSR分科会」「労働環境改善分科会」「CS向上推進分科会」「環境対策分科会」の4つの分科会は、個別活動の内容について議論し、活動の進捗や目標の確認を行っています。また、気候変動関連情報の拡充を見据え、スコープ1、2、3におけるCO₂排出量の現状分析と目標設定に対する進捗管理を行うプロジェクトチームが稼働しています。

ESG・サステナビリティ推進体制図



③CO2 スコープ1, 2, 3 排出量（2020年度）

スコープ		算定方法	排出量 t-CO2	比率
スコープ1 燃料の燃焼に伴う排出		燃料使用量に原単位を乗じて算出	54,317	0.204%
スコープ2 電力使用に伴う排出		電力使用量に原単位を乗じて算出	257,443	0.965%
スコープ3 上記以外の排出		以下のカテゴリ1～15 参照	26,370,549	98.832%
スコープ1, 2, 3の合計			26,682,309	100.000%
1	原材料の調達	部材ごとの調達総額に原単位を乗じて算出	4,910,896	18.405%
2	資本財・生産設備の増設	設備等投資総額に原単位を乗じて算出	20,809	0.078%
3	燃料・エネルギー関連の活動	スコープ1, 2に含まれない燃料・電力使用量に原単位を乗じて算出	45,561	0.171%
4	調達物流・自社が荷主となる委託物流	特定荷主義務範囲の特定に時間を要するため今回は対象外	対象外	
5	事業から発生する廃棄物	廃棄物発生量に原単位を乗じて算出	206,099	0.772%
6	従業員の出張	旅費総額に原単位を乗じて算出	1,633	0.006%
7	従業員の通勤	支給総額に原単位を乗じて算出	3,814	0.014%
8	自社が賃借しているリース資産の稼働	スコープ1, 2に含むため対象外	対象外	
9	自社が荷主となる出荷輸送	特定荷主義務範囲の特定に時間を要するため今回は対象外	対象外	
10	中間製品の加工	中間製品販売無しのため対象外	対象外	
11	使用者による製品の使用	製品の年間エネルギー消費量、耐用年数、販売量に原単位を乗じて算出	20,906,986	78.355%
12	使用者による製品の廃棄処理	製品総重量に原単位を乗じて算出	272,614	1.022%
13	他社に賃貸リース資産	リース資産を非所有のため対象外	対象外	
14	フランチャイズ加盟店の スコープ1, 2の排出量	フランチャイズ加盟店の総延べ床面積にヤマダデンキ店舗の㎡当たり排出量を乗じて算出	2,137	0.008%
15	株式投資・債権投資	算出に影響を与える程度の投資目的での株式を所持していないため対象外	対象外	

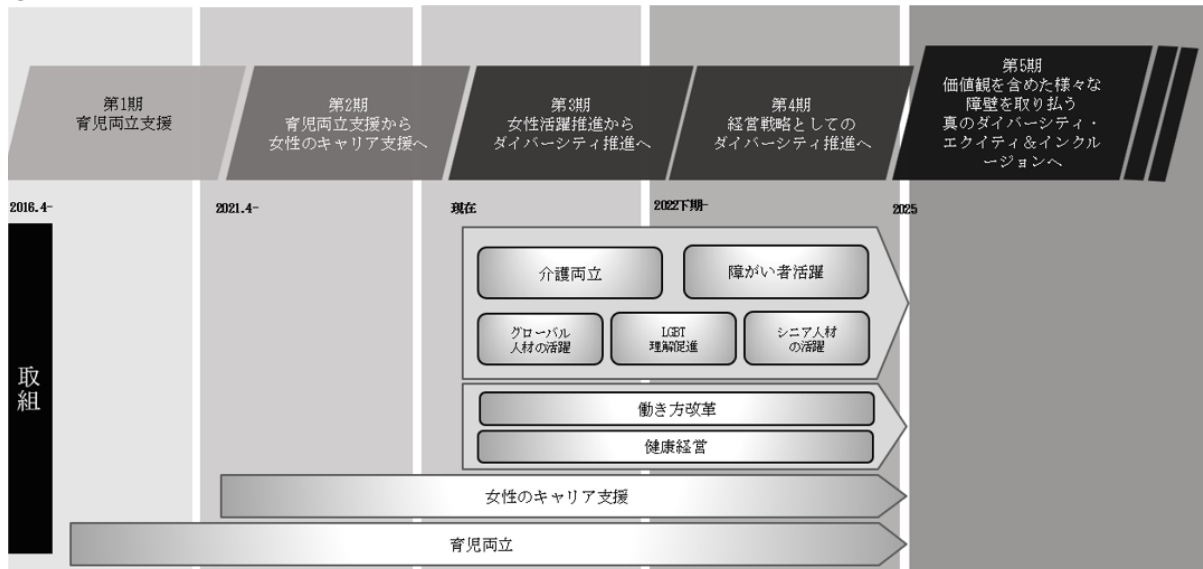
[ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョンの推進と取り組み]

①ポリシー

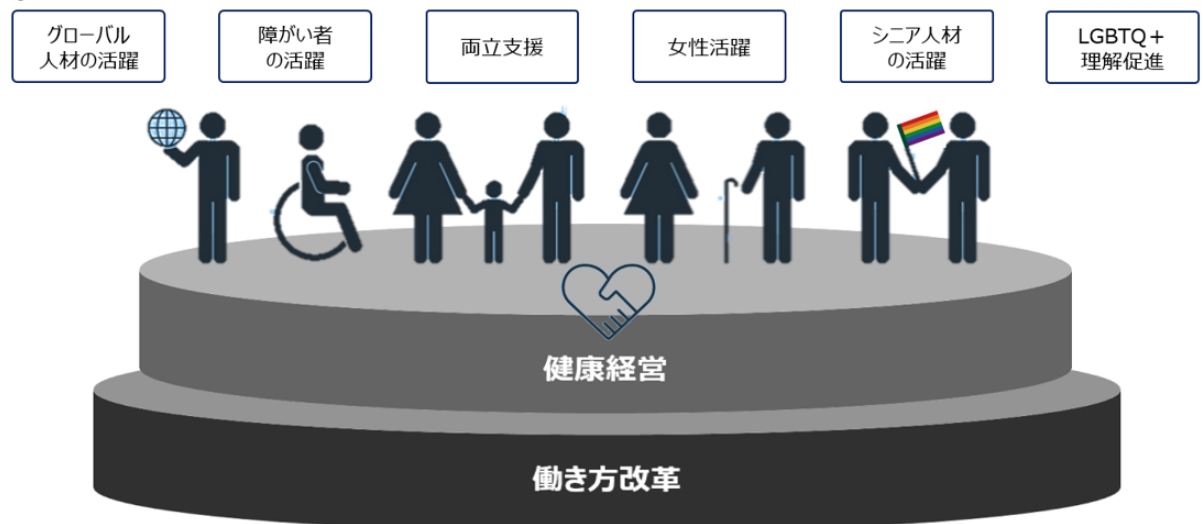
ヤマダホールディングスグループにとって最大の経営資源は「人材」です。人種、国籍、年齢、性別、性的指向・性自認、宗教、信条、文化、障がい、キャリア、ライフスタイルなどに拘らず、多様なバックグラウンドを持つ社員が互いに尊重し合い、能力や個性を発揮し、働くことを通じてやりがいや成長を感じられる企業こそが企業成長の礎となります。

社員間の日々の何気ないコミュニケーションは新しいイノベーション創出のきっかけとなり、また、それぞれのバックグラウンドを活かした多様な人材が活躍できる組織の力は、多様な社会のニーズに対応する原動力ともなります。ヤマダホールディングスグループは、社会環境の変化に対応した商品とサービスの提供を通して、ステークホルダーの皆さまと共に持続的に成長するため、ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョンをヤマダホールディングスグループの「成長戦略そのもの」と位置づけ、グループ全体で推進していきます。

②ロードマップ

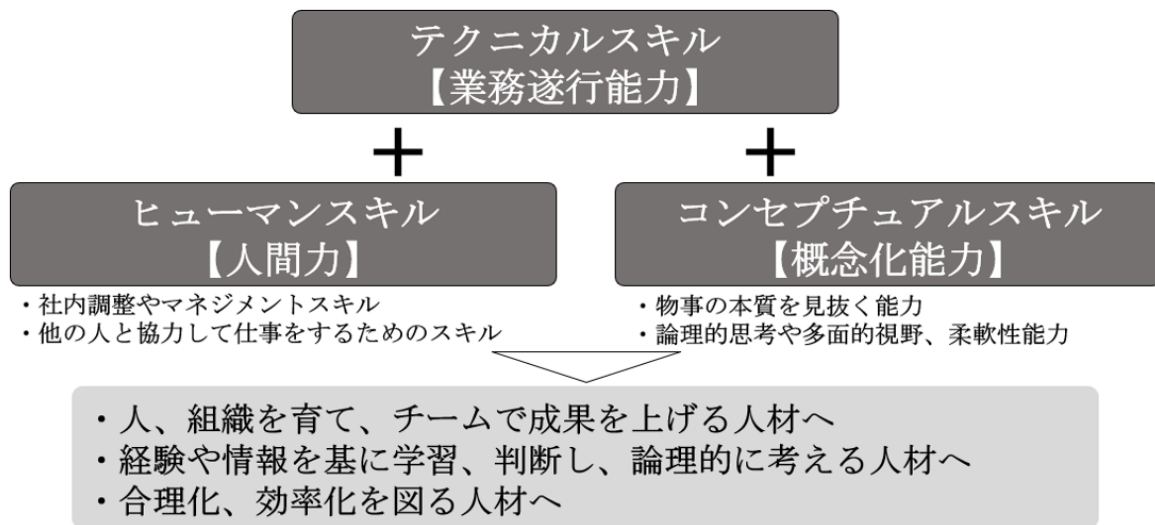


③具体的な取り組みと方針



具体的な取り組み	主な取り組み方針
両立支援	ライフステージに合わせた柔軟な勤務制度の確立や多様で働き方の促進
女性活躍	両立支援と連動したライフステージの変化対応型、活躍する環境づくり ジェンダー平等を実現する行動規範に基づき、性別枠割の排除を推進 積極的な採用強化、次世代幹部の育成、管理職登用推進とスキルアップ支援
障がい者の活躍	積極的な雇用を通じた共生社会の実現
シニア人材の活躍	定年63歳まで延長（2022年4月制度改定）、キャリアを活かした業務の継続
グローバル人材の活躍	外国籍人材の積極的雇用を継続
LGBTQ+への理解促進	研修を通じてLGBTQ+の理解促進とアンコンシャスバイアスの排除 互いを尊重して多様な個性が機能し合う心理的安全性を確保した職場づくり

④人材育成の考え方



⑤階層別のスキルと研修テーマ

		パートナー	メンバー	ローワーマネジメント	ミドルマネジメント	トップマネジメント
コンセプチュアルスキル	70%	・社会人に求められるもの ・社会人としての振る舞い ・社会人の基本行動	・社会人の基本行動 ・社会人としての振る舞い ・仕事の進め方 ・将来を考える ・入社後の経験と成長	・期待に応える ・後輩の指導 ・問題解決力を高める ・チームビルディング ・メンタルブロックの除去 ・更なる成長のために	・管理職に求められるスキル ・業務のマネジメント ・育成のマネジメント ・将来を描く	・上級管理職マネジメント ・経営理念とビジョン作成 ・アカウントマネジメント ・労務のマネジメント ・行動計画の立案 ・方向性を導く ・意思決定の思考プロセス
		・一般、社会常識 ・社会人基礎力 ・ビジネスコミュニケーション ・ビジネスマナー総合	・自身のモチベーションUP ・コンプライアンス知識 ・情報セキュリティの基礎 ・チーム業務の進め方	・リーダーとしてマネジメント ・後輩、新入社員育成法 ・ハラスメントの基礎知識 ・上司の補佐と後援支援	・実践すべきコンプライアンス ・チームリーダーの育成 ・職場のハラスメント除去 ・管理職のリーダーシップ	・チームマネジメント ・上級管理者の法的義務 ・管理職の育成 ・戦略立案のポイント
テクニカルスキル	専門知識 20%	・加齢マネジメント ・コンプライアンス ・メンタルヘルス ・周囲との良好な人間関係	・営業基礎知識 ・営業活動の意義と理解 ・CS現場対応基礎 ・接客、ホスピタリティ	・接客、接遇 ・サービス業の接客 ・リピーターを生む心理接客術 ・客単価を上げる実践論	・店長研修 ・売上を伸ばすマーケティング論 ・利益管理	・エリア内のマネジメント研修 ・エリア内のマネジメント ・エリア内のCS向上 ・エリア内の売上向上 ・エリア内のES向上
	会社知識 10%	ヤマダデンキの礎、社内規程やルール、ネットリテラシー、社会的取り組み				

3. 四半期連結財務諸表及び主な注記

(1) 四半期連結貸借対照表

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当第1四半期連結会計期間 (2022年6月30日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	57,184	67,655
受取手形	4,647	4,288
売掛金	68,753	70,629
完成工事未収入金	2,378	2,462
営業貸付金	6,322	6,666
商品及び製品	356,043	377,320
販売用不動産	35,542	36,514
未成工事支出金	8,172	10,775
仕掛品	1,234	1,169
原材料及び貯蔵品	3,797	4,324
その他	78,824	81,956
貸倒引当金	△1,622	△1,750
流動資産合計	621,279	662,012
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物（純額）	201,122	201,028
土地	203,087	203,236
その他（純額）	33,281	32,831
有形固定資産合計	437,490	437,096
無形固定資産	40,955	40,726
投資その他の資産		
差入保証金	77,423	77,635
退職給付に係る資産	1,789	1,693
その他	95,587	101,885
貸倒引当金	△2,858	△2,917
投資その他の資産合計	171,942	178,297
固定資産合計	650,388	656,120
資産合計	1,271,668	1,318,132

（単位：百万円）

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当第1四半期連結会計期間 (2022年6月30日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	94,564	111,224
工事未払金	15,037	11,686
短期借入金	60,755	116,803
1年内返済予定の長期借入金	50,300	49,253
未払法人税等	4,677	2,711
未成工事受入金	23,370	27,645
引当金	16,240	11,976
その他	126,741	133,814
流動負債合計	391,688	465,114
固定負債		
長期借入金	111,111	101,107
引当金	2,689	2,180
退職給付に係る負債	31,523	31,636
資産除去債務	35,786	36,395
その他	22,590	22,492
固定負債合計	203,701	193,812
負債合計	595,390	658,926
純資産の部		
株主資本		
資本金	71,100	71,100
資本剰余金	80,989	74,977
利益剰余金	564,882	564,398
自己株式	△61,251	△59,220
株主資本合計	655,720	651,255
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	△24	△598
為替換算調整勘定	1,404	1,674
退職給付に係る調整累計額	△397	△189
その他の包括利益累計額合計	982	886
新株予約権	1,725	1,774
非支配株主持分	17,849	5,290
純資産合計	676,277	659,206
負債純資産合計	1,271,668	1,318,132

(2) 四半期連結損益計算書及び四半期連結包括利益計算書

(四半期連結損益計算書)

(第1四半期連結累計期間)

(単位：百万円)

	前第1四半期連結累計期間 (自 2021年4月1日 至 2021年6月30日)	当第1四半期連結累計期間 (自 2022年4月1日 至 2022年6月30日)
売上高	382,987	375,859
売上原価	264,900	262,468
売上総利益	118,086	113,390
販売費及び一般管理費	96,660	101,127
営業利益	21,426	12,263
営業外収益		
仕入割引	778	641
その他	2,214	2,548
営業外収益合計	2,993	3,190
営業外費用		
支払利息	337	297
売電費用	192	189
その他	161	525
営業外費用合計	691	1,012
経常利益	23,728	14,440
特別利益		
投資有価証券売却益	—	173
特別利益合計	—	173
特別損失		
固定資産処分損	300	75
減損損失	25	45
役員退職慰労金	1,000	—
その他	281	21
特別損失合計	1,607	142
税金等調整前四半期純利益	22,121	14,471
法人税、住民税及び事業税	6,409	6,620
法人税等調整額	△1,447	△6,830
法人税等合計	4,962	△209
四半期純利益	17,159	14,681
非支配株主に帰属する四半期純利益 又は非支配株主に帰属する四半期純損失（△）	△254	1
親会社株主に帰属する四半期純利益	17,413	14,680

（四半期連結包括利益計算書）
（第1四半期連結累計期間）

（単位：百万円）

	前第1四半期連結累計期間 （自 2021年4月1日 至 2021年6月30日）	当第1四半期連結累計期間 （自 2022年4月1日 至 2022年6月30日）
四半期純利益	17,159	14,681
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	△127	△571
為替換算調整勘定	540	270
退職給付に係る調整額	△100	207
持分法適用会社に対する持分相当額	0	△1
その他の包括利益合計	312	△93
四半期包括利益	17,471	14,587
（内訳）		
親会社株主に係る四半期包括利益	17,723	14,584
非支配株主に係る四半期包括利益	△252	3

(3) 四半期連結財務諸表に関する注記事項

(継続企業の前提に関する注記)

該当事項はありません。

(株主資本の金額に著しい変動があった場合の注記)

当社は、2022年4月27日を効力発生日として、当社を株式交換完全親会社とし、株式会社ヒノキヤグループを株式交換完全子会社とする株式交換を実施いたしました。

また、2022年5月6日開催の当社取締役会決議に基づき、自己株式35,342,800株の取得を行いました。この結果、当第1四半期連結累計期間において資本剰余金が6,010百万円、自己株式が2,026百万円減少し、当第1四半期連結会計期間末において資本剰余金が74,977百万円、自己株式が59,220百万円となっております。

(追加情報)

(グループ通算制度の適用)

当社及び一部の国内連結子会社は、当第1四半期連結会計期間から、単体納税制度からグループ通算制度へ移行しております。これに伴い、法人税及び地方法人税並びに税効果会計の会計処理及び開示の取扱いについては、「グループ通算制度を適用する場合の会計処理及び開示に関する取扱い」（実務対応報告第42号 2021年8月12日企業会計基準委員会）に従っております。

(セグメント情報)

I 前第1四半期連結累計期間（自 2021年4月1日 至 2021年6月30日）

報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位：百万円)

	報告セグメント				
	デンキ セグメント	住建 セグメント	金融 セグメント	環境 セグメント	計
売上高					
外部顧客への売上高	318,173	53,964	478	3,674	376,290
セグメント間の内部売上高又は振替高	5,769	1,300	74	2,874	10,019
計	323,943	55,265	552	6,549	386,310
セグメント利益又は損失（△）	21,513	△660	12	255	21,121

(単位：百万円)

	その他 (注1)	合計	調整額 (注2)	四半期連結損 益計算書計上 額(注3)
売上高				
外部顧客への売上高	6,696	382,987	—	382,987
セグメント間の内部売上高又は振替高	2,761	12,780	△12,780	—
計	9,457	395,768	△12,780	382,987
セグメント利益又は損失（△）	356	21,478	△51	21,426

(注) 1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれないその他事業セグメントを含んでおります。

2. 調整額はセグメント間取引消去によるものであります。

3. セグメント利益又は損失（△）は、四半期連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

Ⅱ 当第1四半期連結累計期間（自 2022年4月1日 至 2022年6月30日）

報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

（単位：百万円）

	報告セグメント				
	デンキ セグメント	住建 セグメント	金融 セグメント	環境 セグメント	計
売上高					
外部顧客への売上高	310,544	54,946	527	4,180	370,198
セグメント間の内部売上高又は振替高	4,323	1,494	87	3,609	9,515
計	314,868	56,441	614	7,789	379,714
セグメント利益又は損失（△）	12,674	△1,160	102	346	11,962

（単位：百万円）

	その他 （注1）	合計	調整額 （注2）	四半期連結損 益計算書計上 額（注3）
売上高				
外部顧客への売上高	5,660	375,859	—	375,859
セグメント間の内部売上高又は振替高	2,282	11,797	△11,797	—
計	7,942	387,656	△11,797	375,859
セグメント利益又は損失（△）	286	12,248	14	12,263

（注）1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれないその他事業セグメントを含んでおります。

2. 調整額はセグメント間取引消去によるものであります。

3. セグメント利益又は損失（△）は、四半期連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

（参考資料）

報告セグメントごとの前年同期比較情報

	単位	報告セグメント					その他
		デンキ セグメント	住建 セグメント	金融 セグメント	環境 セグメント	計	
売上高 計 （前年同期増減率）	%	△2.8	2.1	11.3	18.9	△1.7	△16.0
売上高 計 （前年同期差額）	百万円	△9,074	1,175	62	1,240	△6,596	△1,515
セグメント利益又は損失（△） （前年同期増減率）	%	△41.1	—	727.9	35.4	△43.4	△19.9
セグメント利益又は損失（△） （前年同期差額）	百万円	△8,838	△500	89	90	△9,158	△70

Ⅲ 報告セグメントの変更等に関する事項

当第1四半期連結累計期間において、子会社間の合併を実施したことに伴い、従来「その他」に含めていた家具販売事業を「デンキ」に含めております。この変更に伴い、前第1四半期連結累計期間のセグメント情報は、当第1四半期連結累計期間の報告セグメントの区分に基づき作成しております。

（重要な後発事象）

該当事項はありません。